| 平成30年度　第1回　多摩六都科学館組合事業評価委員会　会議録 | |
|---|---|
| 日　　時 | 平成30年5月21日（月）午後2時00分から午後5時00分まで |
| 開催場所 | 多摩六都科学館2階201会議室 |
| 次　　第 | 1　開会のあいさつ<br>2　議題<br>（1）　平成29年度　自己評価の報告について<br>（2）　平成29年度　外部評価について<br>（3）　その他 |
| 出 席 者 | 小谷泰弘委員、坂本和弘委員、柴田徳思委員長、杉浦幸子委員、桧森隆一委員（五十音順）<br>事務局：手塚事務局長、神田事務局次長兼管理課長、豊田主幹、内海主査、小菊主任、プランニング・ラボ（村井代表）<br>指定管理者：高柳館長、廣澤統括マネージャー、高橋リーダー、伊藤統括補佐、石山リーダー、原主任研究員 |
| 決定事項 | ●　平成29年度外部評価について |
| 資　　料 | （事前配布資料）<br>資料1　多摩六都科学館 事業評価報告書（案）<br>平成29年度～平成31年度（3カ年）の中期計画における平成 29 年度実績報告ならびに事業目標の達成度等に関する評価報告<br>資料2　平成29年度多摩六都科学館市民モニター評価表<br>資料3　平成29年度 多摩六都科学館及び多摩六都科学館駐車場指定管理者業務月次報告書<br>資料4　多摩六都科学館利用者・駐車場利用台数集計表及び利用料金集計表（歴年度対照表）<br>（当日配布資料）<br>資料5　平成 30 年度多摩六都科学館及び多摩六都科学館駐車場指定管理者業務事業計画書<br>参考<br>指定管理者自己評価にかかるプレゼンテーション資料<br>多摩六都科学館ガイドー学習利用の手引きー<br>広報の状況 |
| 記録方法 | 発言者の発言内容ごとの要点記録 |
| 特記事項 | 6月15日（金）までに総括的な意見等の欄を記入し、事務局にメールで送る。 |

凡例　発言者の略記（長：事業評価委員会委員長、委：事業評価委員会委員、組：多摩六都科学館組合、指：指定管理者、プ：プランニング・ラボ ）

1　開会のあいさつ

高柳館長、手塚事務局長より開会の挨拶。

２　議題

（１）　平成 29 年度　自己評価の報告について

組：平成 29 年度の事業評価の進め方について説明

指定管理者よりプレゼンテーション

（資料１　事業評価報告書と資料３　月次報告書を併せて指定管理者より説明）

指：当館にいらっしゃる方から「なぜそんなに入館者数が増えたのか。」というご質問を継続的に受けており、「具体的にこうだから増えた。」という説明が出来ていなかった。2020 年の学習指導要領の改訂により「主体的・対話的で深い学び」にまとまり、これは社会的ニーズに合致していて、「主体的・対話的で深い学び」を満足させることが一つの集客につながるのではないかと考えています。深い学びに注目し、Learning Pyramid（出典：National Training Laboratories）を使ってどういう学びが一番効果があるかを説明。（ある授業を行い、半年後にどれだけ覚えているかを調べた事例）

一番効果があった授業が Teaching Others = 誰かに教える授業だった。利用者の能動的な活動を適切に組み込んだ展示を行うことが集客力の源泉になっているのではないか。ゴールデンウィークに実施したしくみラボでの活動（全反射実験での対話　デモとプラクティス）を紹介し、Learning Pyramid の Demonstration、Discussion Group、Practice Doing の辺りのことを実際に展示室で行っていることを説明。そのほか、しくみラボの活動において Teaching Others の事例を紹介。（主体的にペットボトルを動かし、工夫し試す体験者→得意気に母親に教えている体験者）これは体験を言語化している事例であり、結果的に体験者にとって楽しい学びになっている、Learning Pyramid の Teaching Others まで実施出来ているのではないかと考えている。

ICOM による博物館の定義について説明

「博物館とは、社会とその発展に貢献するため、有形、無形の人類の遺産とその環境を、研究、教育、楽しみを目的として収集、保存、調査研究、普及、展示を行う公衆に開かれた非営利の常設機関である」（ICOM 規約（2007 年８月改訂）第３条）

５つの博物館機能が何の目的のために行われるか＝３つの目的：研究、教育、楽しみ

第一次基本計画にうたわれている専門性とエンジョイメントを両立するにつながる部分と考えられる。この３つの目的を満足させることが重要なのではないか。（Education⇒自己の能力を伸ばす、Study⇒物事を極める、探究する　Enjoyment⇒体験そのものを楽しむ）

ゴールデンウィークにちきゅうラボで行った「地質時代と化石」について説明

示準化石と地質時代（古生代・中生代・新生代）体験とセットになったエピソード記憶は効果が大きいことが分かる。ラボで三葉虫、アンモナイト、ビカリアを体験し、展示室でさらに探究的な観察が続く。このようなラボの参加者数は年間入館者数の約３分の１が体験しているとの結果が出ている。家族で楽しい体験となっていることが、リピーターの数などに反映されているのではないか。そのほか、プラネタリウムの生解説などとこのようなエピソード記憶が体験できることがベースになっている。学校教育の部分と科学館で体験できる部分が一体となって「主体的・対話的で深い学び」に近づいていくのではないかと考えている。

指：科学館事業、地域連携事業、マーケティングについて説明

長：何か質問ございませんか。ご説明にあったように「習うより教えること」が大切だと思っている。リーダー育成の講義の際にも「教えること」の重要性を話している。館内でお子さんがお母さんに体験を教えている事例があったがとても良いことだと思う。

指：あのような光景がいつもあるとは限らないのですが、展示室でメモをとっている方もいらっしゃるし、お友達に丁寧に教えている姿というのも見ることができます。学校で習ったことの学び直しとして科学館を利用するなどいろいろな利用の仕方があるのかなと思います。また、ラボで体験したエピソード記憶というのも非常に印象に残るのだと思います。

長：では次に、組合の自己評価の報告をお願いします。

組合より自己評価の報告

組：それでは事業評価報告書の 14 ページをお開きください。

２の中期の重点戦略ならびに業績指標の一覧表をご覧いただきますと、実施状況、実測値とも、まだまだ十分とはいえませんが、一定の水準には達することができたものと思われます。ソーシャル・インクルージョンに関しては、施設維持補修工事としてトイレ洗面台の更新工事を行いましたが、その際に、子どもや高齢者、車いすの利用者などへ配慮した設計にすることなどにより取り組んでいます。

アウトリーチ活動の推進では、組合が構成市の窓口として相談を受け、実施は指定管理者にお願いする形をとることで、間接的ながら前向きに進めているところです。

ボランティア活動の成果の発信では、事例発表などで対外的にボランティアを紹介しています。これらに基づく定性評価ですが、16 ページの自己評価欄で、市民モニターの活動の成果、圏域サテライトの考え方等を整理し、「A」とさせていただきました。

次に 17 ページの「②経営計画」に関する自己評価についてご説明します。

２の業績指標の一覧表をご覧いただきますと、各指標については、「実施」として取組みを表しています。施設の長寿命化計画の検証と作成については、平成 30 年度に実施することとしましたので「検討」としています。18 ページの自己評価欄では、とくに、このような老朽化した施設の維持補修や更新を、財政計画と合わせて検討していくことが課題としてあります。そのような中で、西東京市のはなバスのルート変更により花小金井駅と科学館を結ぶ路線が確保されたことは大きなアクセスの前進で、日祝日や夏休みなどには満車に近い運行状況が見られます。先ほど指定管理者からの説明でも 24～25 万人の利用者数が限界ではないかという説明がありました。駐車場が満車になってお断りをしているような状況が日曜、祝日、夏休みなどにあります。車での集客を今以上に増やすことは困難ですが、このようなバスのルートの確保等で補っていくことが重要であると考えます。今後は、周辺道路の整備状況に合わせて、更に路線バスの乗り入れを働きかけられるよう検討してまいりたいと思います。また、利用者の約５割が自家用車でご来館

されることから、駐車場整備が課題となっておりましたが、おかげさまで平成 28 年度のバス停留所の整備によって一連の事業が完了いたしました。このような結果から、目標の達成状況は「A」とさせていただいております。しかしながら、科学館の施設、設備の老朽化に伴う補修や更新のための財源が不足していることが大きな課題で、リース契約等により経費を平準化するとともに、今後、構成市の理解も得て、どのような方策が可能か検討していく必要があります。以上が組合の自己評価の結果のご報告です。

長：土日は利用者でいっぱいということだったが平日の利用はどうか。

指：平日に大人向けの講座を開催、プラネタリウムの秋番組では大人向けの番組の投影をして、利用を促すよう努力しています。

長：利用は増えてきているか。

指：シニアに対する知名度が上がってきていると考えています。（平日実施のカフェ＆シアターの観覧者数 160 名という結果などより）

長：構成５市（小平市・東村山市・清瀬市・東久留米市・西東京市）で科学館がどれだけ知られているか。科学館を知らない人に働きかけることは難しいことであるが、利用者数 24 万人を維持するためにも重要なことだと思う。

委：年間で施設補修にどのくらいの費用がかかっているか。

組：平成 27 年度くらいから 3,000 万円ほどですが、年によっては 7,000 万円を超えるようなこともあります。今後の見通しですが、年間 2,500 万円は経常的に費用がかかっていくと考えています。

長：プラネタリウムの次の更新時期はいつか。

組：基金の積み立てについては出ていくものの方が多く、だいぶ心もとない状況で、平成 43～45 年度には次のプラネタリウムの更新が差し迫ってきている。５年後に大型空調機の更新（約２億円）、さらに５年後には電気設備の更新、さらに５年後には給排水設備の更新も予定されています。５年ごとに約２億円ずつの更新を行っていかないと最低限の施設の維持ができない状況にあります。

長：構成５市の負担金を増やすことはやはり難しいか。

組：負担金は５市の負担になっているので組合の事情をよくお話して、ご理解を得ていくような努力をしていかなければならないと考えています。

長：利用料金と負担金の割合はどうか。

組：全体の収入の３割が利用料金収入となっています。自主財源の比率は非常に高い状況にあります。（一般的には 20%を超えると相当高いと考えられている。）ただし、この収入は指定管理者の利用料金収入となります。

長：５市は負担金についてどう考えているのか。

組：この建物を維持していくには相当額がかかること、また、利用料金収入に関しましては、現在の数値を維持していくことがある種の目的の数値だと考えています。各市とも公共施設の老朽化に関して臨時的な出費が考えられている状況にあります。公共施設を複合化するか、長期延命化するか、統廃合するか、別の活用をしていくかなどの検討をしているところです。当館は利用料金をいただいて利用していただく施設なので、語弊があるかもしれませんが行政職員が使用するだけの施設とは違います。冷暖房設備はもはやぜいたく品ではなく、日当たりの良い休憩室なども当館の魅力と考えています。事務局としては、当館の良いところを理事者に説明して根拠のある数字で負担金のご説明をしてご理解いただけるような仕事をしていきたいと思います。

長：構成５市に住んでいる人が皆科学館を知っているというような状況を作ることができれば科学館の存続が危ぶまれたときに住民の方から反対の声が出るという状況を作り出せる。この意味で、特に非来館者へのアピールや知名度を上げることが重要だと考えている。

長：構成５市の何%が科学館を知っているなどのデータはありますか。

組：以前実施した各市で行った圏域市民調査での事例ですが、８割の方は知っているという結果でしたが来館したことがないという割合は４割という結果でした。未利用者へのアプローチも戦略的に取り組んできている状況にあり、実施もお願いしています。市民モニターの方々からも未利用者への注文がありますので、そのあたりも触れながら後ほどご報告したいと考えています。

長：分かりました。

委：公共施設で、集客施設の場合は施設の更新をして常に魅力のある状態にしておかないとお客さんは減ってしまう。手入れが行き届いていないとぼろぼろになってしまう公共施設もあるが、その点科学館は良く手入れされている。必要最低限以上のことを行って魅力のある状態にしておかないと年間利用者数 25 万人を維持するのは難しいと思う。先ほど組合のご説明にもありましたが、役所の人だけが使う施設とは違うことを構成市にもご説明して、ご理解いただいた方がいいですね。（ホテルなどもどんどんリニューアルしなければ維持が難し

い状況にある。）

委：入館者の変動について
屋根つきの施設であるということで天候による経年変動などはあるのでしょうか。

指：屋根つきの施設なので、日曜日に雨が降ると多くの利用者にご来館いただける施設です。先ほどプラネタリウムの観覧者数についてお話ししましたが、天気が良く、運動会シーズンの時などに満席にならなかったことが２回あります。幼稚園の利用でも、雨天時のみの利用を受け付けているので、雨天になった場合は、幼稚園のお子さんの利用が 1,000 人近くになるという日もあります。

委：天候による影響を受けるということですね。

指：はい。雨の多い月は利用者数が多いです。天候による影響は大きいです。

委：そのような影響がありながら、年間 24～25 万人の利用者数というのはすごいと思います。

指：資料４をご覧いただきますと、昨年度は 10 月に雨が多く、月の利用者数が 2 万人を超えています。2 月も雪が多く過去最高の月間の利用者数をお迎えしています。

指：最近の状況では、雨が降らなくても利用してくださる幼稚園の団体も増えています。館庭で遊べるというのも良いのかなと思います。また、雑木林が整えば利用してくださるのではないかと思います。

長：英語の講演会についてはどうか。

指（館長）：公募数を満たすかということが心配でしたが、3 倍ほどの申込があり、若い方たちが参加してくださった。この時に英語だけの講演会に子どもは来ないというのは大人の勝手な思い込みであったとの話をしました。比較的分かりやすい英語でお話ししてくださった講演会では、興味の持ったお子さんは質問をしていました。少し難しい英語の講演会ではやはり状況が異なったので、プランニングも大事だと思います。通訳なしの英語のレクチャーは次世代の子どもにとって重要な体験であると思います。

長：子どもの英語力につながるということが親御さんに伝わっていけば、参加者も増えるのではないか。

（指定管理者より資料１　事業評価報告書に沿って自己評価報告）
指：４ページ　①科学館事業
科学館事業としての調査研究活動のほかに、企画展（パズル展）では数学の内容にチャレンジしました。大人向けの講座（平日）がうまくいったこと、英語でのサイエンスカフェを実施するなど、今後もこのようなことを継続して取り組んでいきたいと思います。指定管理者として適正（計画に則して目標を達成している。内容が適正である。）と考え、目標の達成状況を「A」にしました。

⇒「A」適正（計画に則して目標を達成している。内容が適正である。）

指：６ページ　②地域拠点事業－1
ボランティア活動は非常に活発に行われている。従来、ボランティア活動支援と言っていましたが、ボランティア活動連携という言葉に改めさせていただきました。
昨年度から友の会を年間パスポートとロクトメンバーズに切り替えました。一昨年の友の会の会員は 1,500 人、昨年の年間パスポート会員は 4,500 人と 3 倍になりました。そのうち３分の２は構成５市からの利用者ということで、５市からの来館機会が増えたと思います。今後はメンバーズの皆さんのパイロットプログラムのモニターとしての位置づけを強化して、ご意見をお聞きし、今まで以上に来館者ニーズに合ったプログラム開発に役立てていければと思います。

長：メンバーズの子どもは小学校から中学校の低学年くらいまでいて、その後やめてしまうのですか。

指：ご家族でご参加いただいていて、親御さん向けのプログラムも検討しています。ただし、小学校 4 年生まではご来館いただいていますが、5 年生になると来館が減る状況はあります。継続して来ていただきたいということで、中高生対象のサイエンスカフェやレクチャーには小学校の高学年の方もご参加いただけるように工夫しています。

長：いつも言っていることなのですが、友の会やメンバーズとなった方が一時期来なくなることはしょうがないと思っている。継続してメールアドレスなどで連絡できるような状況にしておいて、例えば大人になって科学的な職業に就いた時に「やっぱりあの時の・・・」というような追跡調査ができるようになっているといいのではないかと思う。小さい時の科学館での体験がファンクションとなっているかどうかは分からないけれども、そういうデータを蓄積することによって、子を持つ親が「小さい時から科学館に連れて行こう。」という契機につながるのではないか。

指：ジュニアボランティアがそれに近いのではないのかなと思います。

委：科学研究費をとって、4 年間「乳児の美術館体験」をテーマに研究をしている。美術館ファンでない人が「赤ちゃんに美術館を経験させたい。」と来館している。
今、20 代～30 代の方たちの開発が難しいという結果が出ている中で、5 市の出生率が詳しく分からないけれども、小平市では人口が増えていて子どもも増えてきているというデータがあります。ジュニアボランティアくらい（小学生）の年齢になると関心があれば科学館には来るが、未来館者層にはアクセスできないような状況になってしまう。誕生した子どもたちに母子手帳を交付する時に科学館のリーフレットを渡すなどのインプットが必要だと思う。乳児向けのウェルカムプログラムを用意して幼稚園になる前に来館を促す。そのようにして親御さんが記憶を何度も言っていくことが 20 代～30 代になって赤ちゃんをもう一度連れて来館することにつながる。海外の美術館等を見ても 0 歳児への取組は始まったばかり。美術館でもなるべく早く行いたいと思っている。美術館では「触れる・五感で楽しむ」作品が人気がある。効果は確実にある。市民モニター報告書にあるように、大規模マンションが建設されるということは若い世代の方々の流入が増えることになるので、その世代にアクセスすることが 20 年後に活きてくるのではないかと思う。

指：「知覚のコラージュ制作ワークショップ～大人のための乳幼児美術～」のワークショップについて説明。

委：非常に良いワークショップだと思う。赤ちゃん連れで出かけられるところがないとお母さん方は困っていて、場所を探している状況にある。乳児の段階に特化してアクセスすることが未来館者の獲得につながると考えている。

組：当館の場合は背景が行政でありますし、どの市も「健康」と「切れ目のない支援」に行政課題として取り組んでいる状況ですので、ご相談させていただきながらアプローチできるところから取り組んでいきたいと思います。

委：「ゆりかごから墓場までミュージアムへ」のような感じです。

組：そのあたりの受け皿がないと、転入してもらえない状況にあります。

委：屋根つきで子どもが安心して遊べる場所として小さなお子さんを連れたご家族の水族館利用が増えている。そのような利用が増えれば、平日の利用も増える。

⇒「A」適正（計画に則して目標を達成している。内容が適正である。）

指：８ページ　③地域拠点事業－2
地域の魅力発信ということで、企画展やプラネタリウム番組での取り組み結果や成果を書かせていただいている。

⇒「A+」良好（目標に対し良好な成果を挙げている。内容に優れた点が見られる。）

指：１１ページ　④マーケティング
広報や知名度の向上ということで、先ほどスライドでご説明いたしましたが、学習利用が全校利用となったことは知名度の向上や、校長会で継続して案内をしたことなどの成果だと考えています。また、次年度の利用につなげるために学習の手引きをリニューアルしたこと、キャンペーン（「大人のカフェ&シアター」）の取組により、良いプログラムを実施すればご来館いただけることが実感できました。これからも広報は重要なので、紙媒体やマスコミを活用するなど継続して行うべきだと考えています。

⇒「A+」　良好（目標に対し良好な成果を挙げている。内容に優れた点が見られる。）

指：「学習の手引き」について説明
以前は、内部で作成していた（白黒印刷）が、展示物をカラーで掲載するなどしてより先生方にも科学館を好きになってもらい、一つ一つ展示物等を見ていただき、展示室を走り回るだけで見学が終わりとならないようになればと思いリニューアルしました。

指：展示のストーリーが垣間見えるようなつくりになっているのでより解説が伝わり、先生方の利用の深まりにつながるのではと考えています。

委：先生方に魅力のある「学習の手引き」のようなガイドを作ることはとても重要だと思います。展示室内の動画など作られていますか。

指：現在、実地踏査で事前に来館できない先生に動画を送ったらどうかと検討しているところで、平日のラボの説明動画はすでに作成しています。

委：大学のパンフレットでも科学館でも共通して言えることは、動きとかプロセスが見えることが重要な分野なので、科学館の売りを動画（30 秒ほど）にして作っておくと臨場感など伝わり良いのではないか。（展示物の紹介など）

委：学習の手引きは PDF ファイルでダウンロードできるようになっていますか。

指：なっています。

指：１３ページ　⑤財政計画・体制整備

毎年 4 回行っている企画展のうち、ロボットパーク以外はすべて館スタッフで企画・設計・製作を行っています。スタッフの企画力や業務に対する意識は飛躍的に向上し、いいプログラムができています。先ほどご説明した資料 2、3 にありますように 1 年間にラボプログラム 59 種類、教室プログラム 37 種類を実施し、毎年全体の 2 割くらいは新しいプログラムを作って実施しています。新しいプログラムをどんどん作り出す力がついてきています。2020 年度から小学校でプログラミング教育が始まるため、科学館としてもプログラミングに関する教室は必須と考えており、機材を揃えはじめました。今年度からプログラミング教室を実施する予定です。
また、科学館の価値としてコミュニケーションが重要だと考えており、人材が必要になりますのでスタッフを増員しました。

⇒「A」適正（計画に則して目標を達成している。内容が適正である。）

指：２０ページ　３．総評　使命ならびに活動理念の評価
平成 29 年度は地域の魅力発信につながる事業を数多く実施できたと考えています。地域を意識して事業を実施することができました。英語のみのサイエンスカフェや平日の大人向けの講座などにみられるような新しいことにもチャレンジできるようになってきました。

⇒「A+」　良好（目標に対し良好な成果を挙げている。内容に優れた点が見られる。）

指：これからの課題の欄に書かれている「ソーシャル・インクルージョン」について補足させていただきます。科学館に様々な事情があってご来館いただけない方もいらっしゃいます。来ることができない、来にくいという状況があります。すべてとは言えないのですが、その状況を解決できるような、例えばアウトリーチに行くことやプログラムに参加するための料金を検討することなどを考えていき、科学館に来なくても科学館をハブにして科学に触れられることができるような取り組みをしていかないといけないと考えています。それにはボランティアさんの力をたくさんお借りしています。

長：高齢者の方が利用している施設などの行事で科学館を利用することもいいのではないかと思います。（科学館利用に関する広報を施設向けに行う。）

指：シニアの方向けでは、「カプラ」を使ったアウトリーチを行いました。最初は戸惑いながらご参加いただいていたような様子でしたが、最後の方では積極的に加わっていただくなどして、これをきっかけにまた来てくださいというようなお話になりました。小さなお子様連れの方など科学に触れる機会がなかなかない方に向けたアウトリーチも具体的に何を行うかも含めてしっかりと頭に入れて実施してきたいと思います。

長：最初はアウトリーチをきっかけに面白いことを行っている科学館だと知ってもらえる機会になるといいですね。

○ソーシャル・インクルージョンに取り組んでいく方針であれば、地域の課題がどこにあるのかを研究する必要があること、ターゲットを明確にして取り組んでいくこと、海外や国内での取り組み事例などについて発言があった。また、科学館だけで取り組むのではなく自治体と協力して取り組む必要がある課題ではないかとの発言もあった。（委員からの発言）

（プランニング・ラボ　村井氏より市民モニターの定性評価について説明（資料２））

プ：資料２の１ページ目ですが、今、ご説明のありました事業評価の 5 つの目標ごとにまとめてあるのが下の表になります。ローリングプラン 2016 ができた後、指標についても見直しを行いました。その中で市民モニターに評価をお願いする部分を検討しました。新規で単年度で見ていただきたいものはピンク、中期で見ていただきたいものはブルーになっています。検討した結果、新規のものが比較的多く、今年度試行的に評価可能か全部取り組んでみました。その結果がこの表に書かれています。A 評価が多いのですが、B 評価のものもあります。

「ソーシャル・インクルージョンに基づく活動への取組」は「A に近い B」（今後の期待を込めて）ですが要望として、もう少しターゲットを絞って欲しいですとか、外国人に対する対応を見直して欲しいなどのご意見がありました。

「地域づくりのための交流事業の実施」も「B 評価」で、これについては中期で評価するか、年度ごとに評価するか、来年度も評価したうえで検討したいと思います。ここでは、市民感謝デーに科学要素を入れて科学館らしさを出した方が良い、他市のママフェスティバルも小平市同様に実施してはどうか、大学や企業との連携をもっと進めて欲しいなどの要望がありました。こちらも今後の期待を込めて B という評価結果になっています。

「未利用者への利用促進策の実施」も「B 評価」です。ロクトメンバーズや年間パスポートへの取り組みに対しては評価してもらっていますが、転入者へのアピールがまだまだ足りないなど、未利用者への取り組みに関しては毎年市民モニターの方から非常に多くのご意見をいただいていますので、少し厳しめに B という評価になっています。ただ、こちらもある程度の評価はしていただいております。

評価に取り組んだ結果、「コミュニティ・カフェの導入によって、新たな地域コミュニティの交流・社会参画の場として機能しているか」については、すぐに評価できない指標と判断し、３年後の中期の指標とすることといたしました。

「人的ネットワークに向けた取組」というのは、当面は組合と指定管理者の指標として自己評価を行い、具体的に評価を示せるようになった段階で市民モニターから定性評価を受けることといたしました。先ほどご説明があった資料１の事業評価報告書では黄色で表記してあるのが、市民モニターによる定性評価になります。

２ページ目は、オプションで市民モニターの方に評価していただいた評価結果となります。

外部評価委員の皆様と同じように活動理念や使命についても評価していただいています。参考値としてみていただければと思います。個別のコメントに関しては資料２に記載されていますのでご覧いただければと思います。

（ここで、市民モニターより傍聴者が１名あったので事業評価委員にご紹介した。）

長：市民モニターが減ってしまって募集しなければいけない状況ですか。

プ：人数は減っておりますが、新しい方にも入っていただいています。継続的ユーザーとして評価してくださるような大学生の方にも市民モニターになっていただいています。そうした意見を取り込んでいきながら、評価活動をしていきたいと思います。

長：モニターの方は皆さん圏域住民の方ですか。

プ：はい。

委：市民モニターの方のご意見が記載されているこの資料２は非常に重要な資料だと思います。特にＢの評価が非常に重要で、これからどのようにＢ評価のところに目を向けていくかということ。多摩六都科学館の皆さんは非常に頑張っていらっしゃる。でも年間利用者数 25 万人を維持しなくてはいけないという非常に高いモチベーションを維持する中で、すごい領域の中にいるなと感じています。美術館に関わる人々に科学館の事例はよく話しています。
　カフェのことなども長期で見ていこうというように、いろんな目があることをこの資料を見ると分かります。すぐ何かをやるということではないけれども襟を正すという意味で非常に重要な情報だと思います。

（２）　平成 29 年度　外部評価について　（資料１　事業評価報告書）
各委員で協議の結果、平成 29 年度の外部評価は以下のとおりとなった。
（評価の対象：指定管理者）
4 ページ　①科学館事業　平成 29 年度評定 A
6 ページ　②地域拠点事業－1　平成 29 年度評定 A
8 ページ　③地域拠点事業－2　平成 29 年度評定 A＋
11 ページ　④マーケティング　平成 29 年度評定 A＋
13 ページ　⑤財政計画・体制整備　平成 29 年度評定 A＋
（評価の対象：多摩六都科学館組合）
16 ページ　①事業計画　平成 29 年度評定 A

18 ページ　②経営計画　平成 29 年度評定 A
（評価の対象：指定管理者及び多摩六都科学館組合）
20 ページ　３、総評　使命ならびに活動理念　平成 29 年度評定 A＋

（３）その他

評価報告書コメントは６月 15 日（金）までに事務局へメールで送る。

７月に評価報告書を多摩六都科学館組合管理者である西東京市長に委員長より報告予定。

多摩六都科学館組合事業評価委員会の委員継続について（お願い）について説明。